共生委員会ニュース

ともしび

2024 年度 第３号

2025年３月

共生探究学習委員会



山の手空襲　朗読とピアノの集い

共生論文代表者発表会 開催!

２月２０日（木）、２年生 LHR の時間に、７３期平和共生論文クラス代表生徒による論文発表会が行われました。これは、代表生徒が自分の論文のポイントや工夫を後輩に伝え、よい論文を書く助けとするための会です。

今回は HR303 W.T.さん、HR304 T.T.さん、HR308 F.I.さんがそれぞれ発表と２年生へのアドバイスをしてくださいました。

１年生対象の発表会は、３月１４日（木）、答案返却日の朝におこなわれます。こちらは HR302 K.Y.さん、309 K.M.さん、310 O.E.さんが発表してくださいます。

1 年生の皆さん、ぜひ今後の参考にして下さい。

共生論文 クラス代表生徒表彰(3 月 7 日P.S.講堂)

301 K.M.　「犯罪抑止のためのアプローチ」 -あなたが犯罪者にならないために-」

302 K.Y.　「現代社会における「孤食」の解消の必要性～子ども食堂が果たすべき役割とは～」

303 W.T.　「新しい概念とアンチを共生させるには -4種類のアンチに分類して考える-」

304 T.T.　「これからの日本の再開発をより良いものにするには」

305 O.U.　「出る杭を打ち合う私達 -同調圧力からの脱却-」

306 K.K.　「人々の日常を彩るひとつのピース -伝統工芸とともに生きる-」

307 M.B.　「障がい者殺人事件から考える人間の条件とは
ー内なる優生思想に基づく犯行からわかること-」

308 F.I.　「未然に戦争を防ぐには ー人々の心理から見る戦争の仕組みー」

309 K.M.　「第二次世界大戦」をどう教えるべきか
～平和で対等な世界を作るための歴史修正主義との向き合い方～」

310 O.E.　「子どもの声は騒音か -法的、社会的観点から考える子どもと大人の共生-」

表参道・山の手空襲を語り継ぐ

山の手空襲　朗読とピアノの集い

戦後 79 年となる今年は昨夏「山の手空襲 朗読とピアノの集い」と題し、高等部生徒会の司会のもと、ピアニストの方の生演奏、被災者の方のスピーチ、初等部生・高等部放送部による体験記朗読が行われました。参加した生徒の感想を一部ですがご紹介します。

私は昔から戦争に関する学習をするのが嫌でした。どうしても自分の家族を重ねてしまい、胸が苦しくなるからです。しかし、今回この会に参加して、朗読もさせていただいて、戦争から目を背けて いいわけがないと気づかされました。実際に被災された方の話を聞いて、戦争は地獄という言葉では表せないほど怖く、恐ろしいものだと知りました。そして、朗読の文章も被災された方が書いたと知って、この方の想いを出来るだけ多くの人に伝えなければならないと思いました。

被災された方の「自分がなぜ生きているのか、今でも分からない」という言葉が忘れられません。

この先、爆弾が落とされて火の中を走り回る経験をする可能性は考えにくいし、あってはいけません。しかし、想像して、伝えていくことはできます。今回はそのお手伝いをさせていただけて嬉しかったし、本当に貴重でありがたい時間だったと思います。（2 年・放送部員）

被災者の方のお話しの中で、語り部をしていると思い出したくないことも思い出してしまって辛い、一度語り部を辞めたこともあったが生き残った自分に託された使命だと思ってまた始めた、と仰っていたのを聞き、こうしてお話を聞けることが当たり前ではないのだと感じました。

幼い頃から教えられてきた中、これまでも戦争がダメだということは固定観念のように認識していました。しかし、今回この会に参加しお話を聞いて心の底から絶対に無くさなくてはならないと感じ、それは私の〈意思〉になった気がしました。命があり、やりたいことをし、自分の行きたい様に生きられることに感謝しました。わたしがこの世界に生かされている意味を探しながら、この命を全うしたいと思いました。（3 年・生徒会役員）

青山にある学校に通いながらも、過去にこのような空襲があったことを今回まで知りませんでした。戦争を実際に経験した世代が少なくなってきたこの日本で、平和とはなにか、戦争がいかにしてはいけないものなのか、改めて考えることができる貴重な機会となりました。戦争を経験したことない世代ではありますが、戦争を知っている世代といえる今を生きる私たちが、今後どのようの日本が国際社会に対して貢献するべきであるのか。また、世界に対してどのように戦争をやめさせることについて主張する ことがいかに大切であるか痛感することができました。（3 年・生徒会役員）

74期 修学旅行 平和学習

原爆資料館を見学して

2年 T.R.

展示を見る前に目を引かれ、深く印象に残ったのは、**「忘れないでください。伝えてください。」**という壁の文字でした。それは日本語だけでなく、英語や中国語など４か国語で書かれていました。被爆した方々が一番伝えたいのはこれなのだとひと目見ただけでわかり、入館早々に涙が出そうになりました。

もう一つ、見学しながら思ったことは、修学旅行生が目立つ中、一般の人は外国人の方が多かったということです。外国の方が熱心に展示を見ている姿を見て、本当に感動しました。たくさんの観光名所がある中で長崎を選び、原爆資料館に足を踏み入れてくださったことが、何より嬉しかったのです。もしかしたら原爆を投下した国の人かもしれないのに、少しでも原爆の被害について知ろうとしてくれているという事実が、私の心を動かしました。それを感じられただけでも、長崎に来てよかったと心から思いました。

資料館の展示はやはり心が重くなるものではありましたが、原爆投下の流れや、被害の実相を語る物を直接見て、得たものはたくさんありました。特に印象に残ったのは、「黒焦げの遺体のかたわらに立ちすくむ少女」の写真でした。その少女がどのような状況だったかはわかりません。親を亡くしたのか、兄弟を亡くしたのか、どこか傷ついているのか。しかしその表情と姿から、私はいろいろなものを感じ取りました。絶望感、悲壮感、孤独感・・・すべてを諦めたような、そんな姿でした。こんな小さな子が、壮絶な出来事を体験したことに悲しみが溢れました。たった一日で、数分で、数秒で、人間をここまで追い込むのかと、驚くとともに憤りを感じました。

他にも、人間の手の骨とガラスが溶けてくっついているものや、爆風によって一本柱になった鳥居など、原爆の威力を物語っているものを見て、恐怖を覚えました。実際に現地に行って、自分の眼で見て、感じるということの大切さを学び、とても良い経験になったと思います。もう二度とこのような悲惨なことが起こらないように、多くの人が原爆資料館を訪れ、平和を祈ってくれたらと願わずにはいられません。



「平和講話」を聞いて

2年 A.A.

原爆の被害にあったのは池田さんが小学校１年生の時で、それから約８０年もの時が経っているのに、その時の情景や心情をまるで小説のように詳細にお話しくださった。これが実際に原爆を体験したという〈現実〉であって、どれほどの大きな傷であり、８０年間ひと時も忘れることのない記憶になったのだと考えると、本当に心が痛んだ。

夏休みも資料館でたくさんの写真や遺物をみたけれど、実際にお話を伺うというのは、その何十倍も私の心にずっしりとした重みを残した。

私の祖父母は戦争の後に生まれたので、これまで戦争を体験した方からお話を伺う機会はほとんどなかったが、このような機会を得る度に、絶対に戦時中の人々の記憶を途切れさせてはいけないと強く思う。

いま私は受験をするか悩んでいたり、来年の吹奏楽コンクールのことを考えていたり、〈未来〉のことをたくさん考えることができる。一方、あまり過去のことを長く深く思い出すことはない。しかし、池田さんのような、戦争や原爆を体験した人たちは戦時中、とにかく今を生き延びることで精一杯で、一日一日を安全に暮らすという〈現実〉を見すえることしかできなかったし、その上戦争が終わった後も忘れることのできない、深い傷が刻まれた記憶を抱えることになったのだ。

そう考えると、「この平和な時代に生まれてよかった」と思うだけでは済まされないのだと痛感させられる。いま私は〈学ぶ側〉にいるけれども、あと数年もしたら〈伝える側〉の年齢になる。しかしその時には、戦争の実体験を伝えられる人はさらに減少しているのである。体験していないから何もできない、というのではなく、〈学ぶ側〉であるからこそ感じたこと・伝え続けていくことの大切さをこれからの〈学ぶ側〉の人たちに訴えかけることはできる。平和学習の期間で終わらせてしまうのではなく、これから先何十年、絶対に忘れてはならない。



中等部からの数年間で得られた平和学習を無駄にせず、伝えていく責任感を持ち続けながら生きていきたい。